

我が家の物置小屋の奥には、子供時代の思い出のかけらがしまっており、縁が欠け、少しびつに傾いたガラス鉢。これを父が買ってくれたのは、小学校に入って最初の夏休みだった。

あの頃の私は担任の先生も心配するほどひっこみ思案だった。「まゆちゃん」という唯一の級友が転校してしまおうと、誰も私の家に遊びに来なくなつた。「まゆちゃんよ、どうしてさあ、いつかまた会えるかな」と手紙を書きおくり、まゆちゃんからの返事を待ちながら何日も過ぎた。ある晩、独りぼっちの私を元気づけようと、父と母が潮祭りに連れ出してくれた。夕暮れが涼やかな夜風をはこんでくるのを待って、二人手をつないで提灯の灯る街路に繰り出せば、響き渡る笛や太鼓の調べ。ずらりと立ち並ぶ露店の列。ふんわり甘い綿菓子や香ばしい魚介の炭火焼きに舌鼓。そして、港を埋め尽くす人だかりの頭上、どーんと勢よく空気を打ち付け、大きな光の環が次々と浮かんでひらがり、そのたびに人々は歓声をあげる。

ただその晩、盛大な花火よりも私の気を引いたのは、隅っこに佇む小さな金魚すくいのお店だった。

四角い生け簀のなかで、群れをなして泳ぐたくさんのお魚たち。私にもつかめるかな。ところが、薄い紙の杓子はみるみるうちに水のなかで溶けてしまった。肩を落としてしまった私に、お店のおじさんは陽気に声をかけてくれた。

「お嬢ちゃん、がっかりすんな。今日は祭りの最終日だ。好きなものを一匹持つてきな。さあ、どれがいい？」

「ほんとどう……いやあ、この子……」

恥ずかしくがりがりなくせに遠慮というものを知らなかった私は、とびきり立派なヒレをもつた子を指さした。

「よっしゃー」と、おじさんはお椀でその子をヒョイとすくい上げてビニール

袋に入れると、私の肩をぽんとたたいて言ってくれた。

「大事に、かわいがってやってくれよ。」

こうして、うちの家族に加わった金魚は、離れ離れになった親友の名前をもらった。金魚のまゆちゃんは、真珠のような白と明るい朱色のまだら模様をしていた。大きく広がる尾びれをひらひらさせて泳ぐ姿は、ほんとうに優雅だった。窓辺に置いたガラス鉢。そして今も私の手元にある。のびやかな陽の光をあびると、二色のうろこがキラッと光って、ひるがえって、はまた光る。子供ながらの感性で私はすっかり金魚と対話できている気分だった。私が呼びかけると、それに心えるように寄ってくる。ご飯の時間には嬉しそうに水面からちよつと顔をだして、突き出た口をバクバク、私が指先を水につけると近づいてはチュッ。その口づけがまた、くすぐったく愛くるしくて。

こんなふうにして一週間、一か月と過ぎ、空気が少しずつ冷たくなつたある日、金魚のまゆちゃんも我が家からいなくなつてしまった。元気が無さそうに水の底でどつどつしているの、不思議におもつた次の朝、やき腹を上にして浮いていた。私はあの時どれだけ悲しかったのだろうか。遠くの街に行ってしまったまゆちゃんからの便りは結局、届いたのだったろうか。なぜか思い出せない。

でも、あでやかに水の中を舞う姿は、今でもはつきりと記憶に残っている。だから言えるのだらう。金魚のまゆちゃんは、友達との別離がもたらした空白を、せまやかな喜びで満たしてくれて、小さく儂い命のきらめきを、短い夏の時間すべてをかけて私に示してくれたのだと。

Essay



高橋優季 Yuki Takahashi

子供時代を小樽市で過ごし、大学進学を機に上京。首都圏を長きに渡り回遊した後2018年秋、鮭の川上りより故郷に帰還。現在、小樽商科大学言語センター准教授。